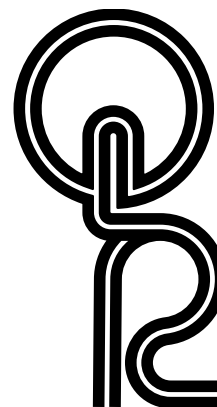


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 13 No.6, 2006



2004年12月のスマトラ沖地震津波で運ばれた巡視艇(タイ南部 Khao Lak州、「熱帯アジア海岸平野の津波被災地域における自然災害軽減に関する国際会議」巡検にて、2006.9.1 久保純子撮影)

Vol. 13 No. 6

December 1, 2006

第四紀学会講習会・シンポジウム案内	50周年記念式典・祝賀会報告
50周年記念展示のお知らせ	50周年記念事業実行委員会議事録
人類科学集会案内	募金のお願いと御礼
「第四紀研究」推薦論文の募集	幹事会議事録
国際会議報告	会員消息

日本第四紀学会第11回講習会のお知らせ 「火山灰層を用いた調査法・分析法」

火山灰層は、野外調査における重要な鍵層として扱われてきましたが、その役割は広域火山灰の検出によってさらに広がりました。それぞれの火山灰のもつ個性をいかに多く引き出せるかが火山灰鍵層の追跡や同定の上でポイントとなります。ただし、火山灰層の鉱物組み合わせなどは、堆積した環境によって異なることが多く、野外における層相記載を詳しく行うことも同時に重要になります。

今回、このような鍵層としての火山灰層の見方、また広域対比などの目的での火山灰層の研究法について、講習会を企画しました。基本的には大学等で野外における調査・記載や、室内における火山灰分析方法などを本格的に学んだことがない(または勉強中である)人を対象とします。

月日：2007年1月27日(土)・28日(日)

場所：滋賀県大津市堅田地域(27日)、琵琶湖博物館(28日)

講師：里口保文(琵琶湖博物館)・水野清秀(産業技術総合研究所)

日程：

27日

集合：午前9時35分、JR湖西線「堅田」駅改札前

(京都駅9時15分発近江今津行き新快速に乗ると間に合います)

その後、堅田駅前から江若交通バス堅田葛川線「途中」行き9時43分発(513便)に乗り「家田道」で下車します。(バスは1時間に1本しかありません。周辺には駐車場がありません。)

内容：フィールドでの柱状図の作成方法、火山灰層の記載法、サンプリング方法など

解散：午後5時までには、堅田駅に戻り、一旦解散の予定(懇親会検討中)。

28日

集合：午前9時40分 琵琶湖博物館前

(JR草津駅西口から近江鉄道バス「烏丸半島」行きバスで「琵琶湖博物館」下車、片道420円、約22分(草津駅9時10分発に乗ってください))

自家用車で来てもかまいません(博物館駐車場あり)。

内容：火山灰の処理法、火山ガラスの分類、鉱物の同定、屈折率測定など分析実習と講義

解散：午後3時頃予定

*注意：宿泊が必要な人は各自で予約してください。また、スケジュールに変更があった場合には、追って連絡いたします。

定員：18名程度(申し込み順)

持参物：1日目は、弁当、野外調査に必要なもの(クリノメーター、ねじり鎌、サンプル袋、折尺など)。

参加費：1000円程度(主に交通費)。

申し込み方法：下記連絡先あてに、氏名、住所、所属、連絡先の電話番号、e-mailアドレス、実習に関する要望などを書いた申込書を、e-mail又ははがき、又はファックスにて申し込みください。

申し込み・連絡先：

〒525-0001 草津市下物町1091 琵琶湖博物館、fax:077-568-4850

里口保文(e-mail:satoguti@lbm.go.jp)

締切：1月12日

日本第四紀学会主催シンポジウム 「自然史研究におけるフィールドの活用と保全」のお知らせ

下記のような内容で、第四紀学会主催のシンポジウムが行われます。参加費は無料で、事前登録は必要ありません（ただし講演要旨集代有料の予定）。ふるってご参加下さい。また当日午前中、同じ会場にて評議員会が開催されます。なお、各講演のタイトルや時間配分などは変更になる場合があります、詳細は第四紀学会ホームページなどでお伝えします。

シンポジウム「自然史研究におけるフィールドの活用と保全」

日時：2007年2月3日（土）13時～17時

場所：日本大学文理学部図書館3F オーバルホール

東京都世田谷区桜上水

京王線「下高井戸」または「桜上水」駅下車徒歩約10分

詳しいアクセス情報は日本大学文理学部のホームページ <http://www.chs.nihon-u.ac.jp/> を参照してください。

趣旨：

自然史を研究する上で大変重要な地形や地質露頭、遺跡地などが、最近ではどんどん消失しつつあり、これらを保存する必要があります。しかし、多くの市民の理解を得るためには、まず地形・地質・考古情報などを含んだ土地がそこに生息する動植物と同様に「自然遺産」を形成しているという認識を持ってもらい、同時に生活の中でもこうした自然と触れ合うさまざまな利点を訴えることが大事であると考えます。このシンポジウムを通して、野外研究の場の活用と保存に向けた方策を探っていきたいと思います。

プログラム

13:00 - 13:10

あいさつ（町田 洋：日本第四紀学会会長）

13:10 - 13:50

地学野外観察の推進とフィールドの保全（小泉武栄：東京学芸大学）

13:50 - 14:20

高等学校での地学野外学習の現状（田村糸子：都立若葉総合高校）

14:20 - 14:50

ジオパーク：地質遺産を用いた地球科学の普及と地域振興 - 世界のジオパークの例と日本での推進活動 - （渡辺真人：産業技術総合研究所）

14:50 - 15:10 休憩

15:10 - 15:40

天然記念物指定の目的（桂 雄三：文化庁）

15:40 - 16:10

谷戸の景観を守る市民運動の事例（中塚隆雄：瀬上の森パートナーシップ）

16:10 - 17:00

総合討論（パネルディスカッションを中心として）

世話人：水野清秀（産業技術総合研究所）、遠藤邦彦（日本大学）、久保純子（早稲田大学）

問い合わせ先：日本第四紀学会企画担当幹事 水野清秀

産業技術総合研究所地質情報研究部門

〒305-8567 茨城県つくば市東1-1-1 中央第7サイト

TEL：029-861-3681, FAX：029-861-3653, E-mail：k4-mizuno@aist.go.jp

日本第四紀学会50周年記念展示が大阪市立自然史博物館でも見られます

50周年記念事業実行委員会では、本学会の50周年を記念して、学会の活動を紹介する展示を豊橋市自然史博物館（開催期間：7月14日～10月9日）、兵庫県立人と自然の博物館（9月9日～11月5日）、産業技術総合研究所地質標本館（10月3日～11月12日）で行ってきました。実行委員会の当初の計画にはなかったのですが、このたび大阪市立自然史博物館のご好意により、同館で追加の展示を行うことができることになりました。学会のこれまでの歩みや現在の姿、あるいは今後の展望など学会活動全般について、より多くの会員の皆様や、より多くの一般の方々に知っていただくのが目的です。これまでの3ヶ所での展示を見落とした方は、ぜひこの機会に大阪市立自然史博物館で50周年記念展示をご覧になって下さい。なお、同館の詳細についてはホームページ（<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/index.html>）をご覧ください。

展示場所：大阪市立自然史博物館本館内
住 所：大阪市東住吉区長居公園1-23
（JR阪和線長居駅下車徒歩1km、地下鉄御堂筋線長居駅下車徒歩800m）
電 話：06-6697-6221（代）
開催期間：2006年12月1日（金）～2007年1月31日（水）
入館料：300円（大人）、200円（高校生・大学生）、中学生以下は無料。
開館時間：9:30～16:30（入館は16:00まで）
休館日：月曜（ただし月曜が休日の場合は翌日が休館）および12月28日～1月4日

「第12回人類科学集会」のお知らせ

以下のように第12回の「人類科学集会」（講演会）を開催いたしますので、周囲の方ともお誘い合わせの上ご出席くださいますようお願い申し上げます。

記

日時：平成19年3月2日（金）午後4時30分～午後5時30分頃
場所：お茶の水女子大学 大学本館3階306大講義室（案内図参照）
お茶大（東京都文京区大塚2-1-1）への交通アクセスは
次のWeb頁を参照：<http://www.ocha.ac.jp/access/index.html>

演者：小野 昭 先生（首都大学東京）

演題：「その後のネアンデルタール人骨
- 小フェルトホーファー洞窟遺跡をつきとめた発掘者魂 - 」

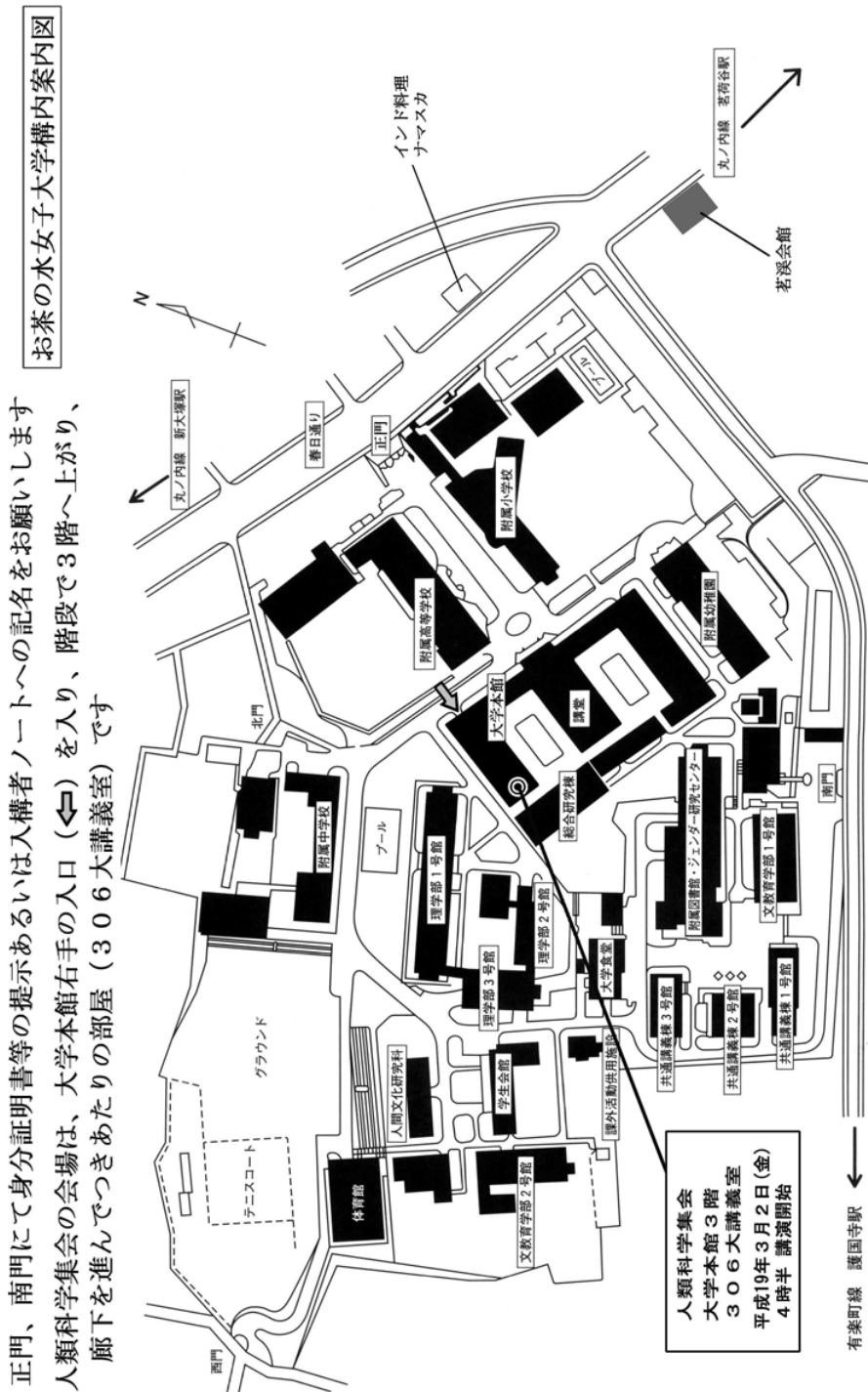
内容紹介：

ドイツのネアンデル渓谷にある小フェルトホーファー洞窟で1856年に発見された人類化石は、ネアンデルタール人のタイプ標本として著名である。ところが、押し寄せる産業革命の波によって、ネアンデル渓谷の石灰岩の採掘が盛んとなり、1900年には渓谷にある全ての石灰岩洞窟は破壊された。そのため正確な出土位置はおろか洞窟の位置も不明のままであった。ドイツの二人の若い考古学者の執拗な探索によって、人骨の出土地点がついに1999年1月21日に特定された。場所を特定するための試掘調査で回収した骨片がタイプ標本の骨に接合したのである。いままでだれもなしえなかったことである。これは単に故地を特定した

にとどまらず、ここからネアンデルタール人研究の新たな地平が切り開かれることにもなった。ヨーロッパにおける旧石器研究の近況をまじえて、彼らの発掘者魂を紹介する。

* 上記講演会終了後に懇親会（会費7千円〔学生4千円〕程度）を予定しております。懇親会へ出席希望の方は2007年2月上旬までに下記の人類科学集会のメールアドレスにその旨を送信くださいますようお願いいたします。講演会（参加費無料）にだけ参加される方は事前申込みの必要はありません。

人類科学集会幹事：お茶の水女子大学 松浦秀治, 近藤 恵
 人類科学集会専用メールアドレス：pananthropology1994@yahoo.co.jp



第四紀研究「論文賞」と「奨励賞」の設置と推薦論文の募集について

日本第四紀学会 2006 年大会において、前号の通信で報告しましたように、「日本第四紀学会論文賞」と「日本第四紀学会奨励賞」(以下、論文賞と奨励賞)が 2006 年度から設けられました(詳細は学会賞規定と内規をご参照ください)。従来の「日本第四紀学会論文賞」は、若手の研究奨励を目的としていましたが、これを改め、年齢制限のなく優れた論文に対して表彰する「論文賞」と年齢制限を設けて若手を対象とした研究奨励の「奨励賞」の 2 本だてとなりました。

「論文賞」: 会員を含む論文著者全員に授与。毎年 1-2 件程度。対象は、掲載されたすべての論文(短報を含む)。

「奨励賞」: 会員である筆頭著者に授与。年齢は選考年の 4 月 1 日で 35 歳以下。毎年 1-2 件程度。

これらの賞は、規定により、会員の皆様から自薦・他薦によって候補論文と候補者を御推薦頂き、論文賞受賞候補者選考委員会において候補論文・候補者の選考と受賞論文と受賞者の決定を行うことになっております。受賞論文と受賞者は 6 月末日までに決定され、8 月に開催される 2007 年総会で表彰される予定です。

つきましては、下記を御参照の上、「論文賞」の受賞論文と「奨励賞」の受賞候補者を御推薦頂きますよう、会員各位にお願い申し上げます。

1. 選考対象: 「第四紀研究」第 44 巻(2005 年)および第 45 巻(2006 年)に掲載された論説、短報、総説、資料、講座及び特集号の論文。「論文賞」の場合は著者に会員が含まれることが必要。「奨励賞」の場合は、筆頭著者が会員であること。
2. 推薦書類: 推薦書類には、推薦者名(自薦を含む)、賞の名称、「論文賞」の場合は全著者名と受賞候補論文名(巻号頁を明記)および推薦理由を、「奨励賞」の場合は受賞候補者名と受賞候補論文名(巻号頁を明記)および推薦理由を記入する。
3. 推薦書類の提出先:
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 519 洛陽ビル 3 階
日本第四紀学会 論文賞受賞候補者選考委員会
4. 推薦書類の受理期限 2007 年 3 月 31 日(必着)

「熱帯アジア海岸平野の津波被災地域における自然災害軽減に関する国際会議」(International Conference on the Mitigation of Natural Disasters in the Tsunami Affected Coastal Regions of Tropical Asia) 参加報告

谷川晃一朗*¹・南雲直子*¹・久保純子*²

(*¹ 早稲田大学大学院、*² 早稲田大学教育学部)

2004 年 12 月 26 日に発生したスマトラ島沖巨大地震によって引き起こされた津波による海岸平野への影響と、今後の自然災害軽減に関する問題を自然科学的側面から検討する国際会議が、本年 8 月 31 日～9 月 1 日にタイ国プーケットにて開催された。主催は日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業の「地域特性に基づく熱帯アジア臨海域の自然災害軽減に関わる研究連携」プロジェクト(研究代表者: 名古

屋大学 海津正倫教授)で、日本第四紀学会海岸線委員会が共催した。

この会議は名古屋大学の海津正倫教授と、タイの Prince of Songkhla University の Dr. Charlchai がオーガナイザーとなって開かれたもので、日本、タイ、インドネシア、バングラデシュなどアジア各国から学生も含め約 50 名が参加した。2 日間の日程のうち、1 日目は各国の研究者による地震や津波災害に関するワー

クシヨップ、2日目は、2004年12月26日に起こったインドネシア・スマトラ島沖地震の津波による被害地域を中心とした巡検であった。

1) ワークシヨップ

2006年8月31日、プーケット市内のパールホテルにて開催された。はじめに名古屋大学の安藤雅孝教授によるキーノートスピーチ(地震によりどのように津波は発生するか)があり、地震発生の分布や津波の発生メカニズムなどについていねいに説明され、地元タイをはじめ、インドネシア、バングラデシュからの参加者からの大きな反響が感じられた。

その後、2004年12月26日のスマトラ津波と2006年7月17日のジャワ津波によるタイ西海岸、スマトラ、バングラデシュ等における被害状況やリモートセンシングデータの活用についてが報告された。とくに、タイのリモートセンシング研究センターである GISTDA やインドネシア、ジョグジャカルタの Gadjah Mada 大学の研究者によるリモートセンシングデータの活用が印象的であった。

その他、ポスター発表としてタイ、インドネシア、日本から参加があった。

参加者はタイ(プリンスソクラ大、土地開発局、GISTDA)、インドネシア(バンダアチエ Syiah Kuala 大、バンドン工科大、ジョグジャカルタ Gadjah Mada 大)、バングラデシュ(チッタゴン大)、日本(名古屋大、東大、鳥取大、早稲田大)などからであった。

2) 巡検

2006年9月1日の巡検では、2004年12月26日に起こったインドネシア・スマトラ島沖地震の津波による被害地域を見て回った。フィールドは主に、プーケット島より北のマレー半島西岸部の Khao Lak 州である。以下、その行程と観察地点を示す。

まず最初に、Khao Lak 南部のリゾートホテル跡を訪れた。2階建てのコテージがいくつか残っていた。この付近での津波の高さは5~6mだったようで、コテージの屋根の部分は壊れていなかったが、1階、2階部分は窓ガラスや外壁などが壊れていた。この周辺では約100人の住民が犠牲となっただろう。海岸には TUNAMI HAZARD ZONE と書かれ、津波の高さ、避難場所まで距離、避難ルートマップがそれぞれ示されている看板や柱が設置されており、これらの標識はほぼ全ての観察地点で見られた。

次は Ranong にある Kasetsart University の Andaman Coastal Research Center を訪れた。この施設も海辺にあるため、インドネシア・スマトラ島沖地震の際には、オフィスが押し流されてしまい、新たなオフィスが建てられていた。ここでは、津波被害による周辺住民の



Pa Ka Rang 岬周辺の津波石(海津正倫撮影)

悲惨な状況をビデオで見た。施設内には津波後に設置された警報システム装置があり、今回の津波の教訓が活かされているようだった。研究センターの横には、津波の被害をそのまま保存している区画があり、「津波資料室」と流されて基礎だけになった家や、波でひっくり返り家にぶつかった車などを見学した。

予定を大幅にオーバーし、遅い昼食後、Pa Ka Rang Cape を訪れた。そこでは岬を取り囲むように津波によって運ばれてきた大きな津波石が見られた。砂浜の沖合に大きなサンゴ岩塊がいくつも並んでおり、異様な光景であった。そして、岬から程近い小さな川の河口では、壊れた橋げたやリゾートホテル、津波の影響で河口が大きく削られ川幅が増していた河口を見た。

次は、Khao Lak 平野で、海岸から約1km離れた場所に川を伝って打ち上げられた巡視艇を見学した。川を上ってきたとはいえ、かなり大きな船を運ぶことの出来る津波の威力に圧倒された。さらに、海岸部では、破壊された建物や折れ曲がった鉄のはしご、津波の到達した高さまで樹皮がはがされたヤシの木などを見た。この場所でも津波の高さは約6mだったようである。

今回の巡検は、実際に津波の被害を見ることができ、とても興味深い巡検だった。被害状況を見ると、やはり津波の恐ろしさやその破壊力に驚かされ、より迅速な津波情報の伝達の必要性を痛感した。また、余談ではあるが報告者のうち南雲と久保は学会で2004年12月24日にプーケットを訪れ、空港近くのビーチに立ち寄った。今回の会議の前に再び現地を訪れ、食堂の女性店主に再会することができたのは大きな喜びであった。

最後になりましたが、オーガナイザーである名古屋大学の海津正倫教授、プリンスソクラ大学のチャルチャイ博士、事務局を務められました名古屋大学の高橋 誠助教授、佐々木太郎講師ならびにプリンスソクラ大の関係者の方々に深く感謝いたします。

日本第四紀学会創立50周年記念式典・祝賀会報告

本年は創立50周年にあたるため、8月の大会において50周年記念式典および祝賀会を開催しましたので報告します(50周年記念事業実行委員会事務局長山崎晴雄・庶務幹事久保純子)。

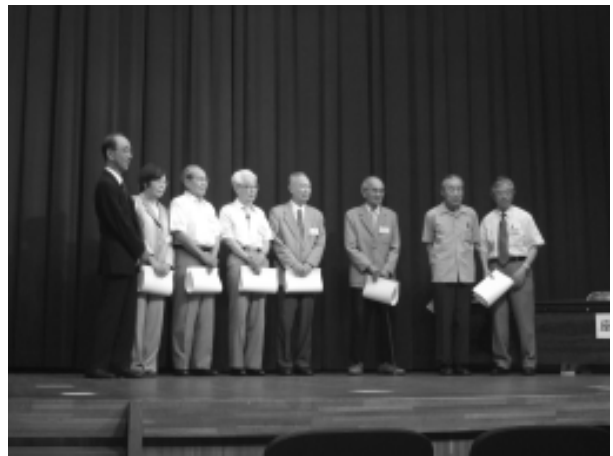
1)記念式典
日 時：2006年8月5日(土)15:15～17:00
会 場：首都大学東京 南大沢キャンパス 講堂小ホール

50周年記念事業実行委員会の山崎晴雄事務局長(首都大)の司会で開会が宣言され、式典の次第が紹介された。次いで50周年記念事業実行委員会の熊井久雄委員長よりあいさつと50周年事業の概要等の紹介があり、町田 洋会長の挨拶と鎮西清高元会長(名誉会員)によるスピーチがあった。

次に、50周年を記念して、学会活動に多大なご協力をいただいている功労者の表彰があった。今回表彰された方、表彰理由ならびに出席者は以下の方々である(敬称略)。功労者には会長より感謝状と記念品が贈呈された。

- ・財団法人東京大学出版会(理由：『日本の第四紀研究』、『日本第四紀地図』、『図解・日本の人類遺跡』、『第四紀試料分析法』、『地球史の現代と近未来 - 自然と人類の共存のために』の刊行など、日本第四紀学会の活動や成果の普及に貢献)代表、山口雅己専務理事
- ・創文印刷工業株式会社(理由：1999年以来会誌および会報の印刷を担当し、日本第四紀学会の活動に貢献)代表、木村有一専務取締役
- ・(株)春恒社学会事業部 中川庸幸(理由：1998年以来(財)日本学会事務センターならびに株式会社春恒社において本会事務局として長年日本第四紀学会の活動に協力され、とくに学会事務センター破産時の混乱からの復旧に多大の尽力をいただいた)
- ・編集書記 綿引裕子(理由：1988年以来本会会誌「第四紀研究」の編集書記として日本第四紀学会の活動に貢献)
- ・英文校閲者 スーザン・シュミット(理由：「第四紀研究」の英文校閲者として長年日本第四紀学会の活動に協力)在米国のため欠席
次いで、1956年の創立時以来の会員(50年会員)の表彰が行われた。対象者は以下の23名の方々で(敬称略、50音順)出席者に会長より表彰状と記念品が贈呈された。

市原 実、太田陽子、小野寺信吾、加賀美英雄、鎌田泰彦、北川芳男、吉良竜夫、斎藤実、阪口 豊、四方哲雄、杉村 新、鈴木隆介、瀬川秀良、田中真吾、中川久夫、成瀬 洋、藤井昭二、藤井 守、藤江 力、藤田和夫、堀江正治、村上一幸、吉川虎雄(氏



新名誉会員の方々と会長(左端)

名のあとの 印は出席者)

その後、16:00～17:00は町田 洋会長による講演「日本第四紀学会半世紀の歩みと展望とくに日本の第四紀編年研究の進歩」が行われた(会長講演は別途報告される予定)。

以上の後、真野勝友副会長の閉会あいさつにより17:00に閉会し、祝賀会へと会場を移した。

2)祝賀会
日 時：2006年8月5日(土)18:00～20:00
会 場：京王プラザホテル多摩 大宴会場
出席者：129名(招待者17名、一般参加者112名)

遠藤邦彦行事幹事の司会により、多摩センターの京王プラザホテル大宴会場で祝賀会が開催された。はじめに開催校の首都大学東京小野昭会員のあいさつがあり、続いて50年会員として表彰を受けた藤井昭二会員のご発声による乾杯があった。約130名の出席者で会場はほぼ満員であった。

歓談の後、新名誉会員、学会功労者、50年会員等を代表してスピーチをしていただいた。はじめに学会功労者として東京大学出版会の小松美加氏、次に名誉会員・50年会員を代表して太田陽子・杉村 新両名誉会員のスピーチがあった。

その後、名誉会員・50年会員・50周年事業実行委員会のご協力で提供された日本第四紀学会アーカイブ写真のスライドショー上映があり、1956年の学会設立趣意書、歴代会長・名誉会員の写真、大会や巡検、国際シンポジウム、学会出版物等の写真等が紹介され、提供者による解説が加えられた。

また、学会賞受賞者の長橋良隆・岩本直哉・田力正好各会員のあいさつと次回大会開催校である神戸大学の兵頭政幸会員(広報幹事)のあいさつがあった。ベテラン、中堅、若手会員が入り交じり歓談がすすむ中で閉会予定時刻の

20:00を迎え、鈴木毅彦大会実行委員長の閉会あいさつで、盛会であった祝賀会が終了した。祝賀会参加者各位には事前予約等ご協力をいただき、厚くお礼申しあげます。

2006年度第1回日本第四紀学会50周年記念事業実行委員会 議事録

日時：2006年8月19日(土) 14:00～17:00
会場：早稲田大学教育学部 6号館5階512室
出席者：熊井久雄(委員長)、町田 洋(会長)、吾妻 崇、池原 研、大場忠道、河村善也、久保純子、斎藤文紀、松島義章、水野清秀、山崎晴雄
議事

1. 募金事業報告：8月17日現在 募金者 241名
募金額 2,737,000円。大会会場でCDを受け取らなかった募金者へは、御礼状を添えて春恒社より発送することとした。

2. 博物館連携：兵庫県立博物館のフロアプランが決まった。第四紀関係の展示室内に第四紀学会のコーナーを設置する。産総研地質標本館の展示は8月25日締め切りで原稿募集中。小野委員が「旧石器時代の文化」を執筆。第四紀学会コーナーには会長挨拶と出版物を展示する。普及講演は小野委員が行い、石器製作実験も行う(担当、橋詰)。

博物館連絡委員会関係：兵庫県立人と自然の博物館は来年度第四紀関係の特別展示を行う。来年度の神奈川博の展示は50周年事業の一環として実施する。

3. 国内シンポジウム報告：

参加者：会員252名、非会員112名、不明1名、計365名が参加した。

会計：学会の大会準備金40万円のほか、参加費、書籍販売会場費等で636,000円の収入があり、アルバイト賃金を差し引いても30万円以上を学会に返せる。

記念パーティー：参加者112名、他招待者17名、収支は12万円の黒字。

総括：レビュー的な講演を聴きたいと言う人が少なくなかった。何年か毎の大会でこのようなシンポジウムを実施した方がよい。会長講演は論文として第四紀研究に掲載する。

巡検：参加者36名、案内者7名で盛況。バスが大きく、移動に時間がかかった。夜間集会は会場の関係で十分な時間が確保できなかった。露頭保存のテーマは今後も継続したい。2007年1月のシンポジウムは露頭保存をテーマにする。巡検案内書は内容をさらに充実させて販売を考える。

4. 国際シンポジウム：シンポジウムの趣旨と参加者のメリットについて議論があり、発展途上国の若手が国際的な最先端研究を学べる場にする必要があるとの意見があった。

各シンポジウムオーガナイザーから英文タイトルが示された。また、全体のタイトルは日本語名が「アジア・西太平洋の第四紀 - 環境変化と人類 -」、英文標記では「Quaternary Environmental Change and Human Activities in Asia and Western

Pacific」とする。

シンポジウムの日程は2007年12月上旬としていたが、AGUの開催時期等の関係から11月下旬に変更する。産総研と日程調整を行い正式に日程を決定する。

スケジュールは2007年11月実施の場合、逆算していくと 8月20日 登録(受付)最終締め切り
4月 登録開始
2006年10月 第1報作成

第1報に載せる情報 シンポジウムタイトル、日程、セッションタイトル

組織委員会とコンタクトアドレス 産総研内に設立してもらいたい。これに関して実行委員会委員長と事務局長が産総研研究コーディネータを訪問して正式に依頼する。

参加費に関連して、運営について(外部委託を行うかどうか)の検討が必要。

5. CD出版。タイトルは「デジタルルック最新第四紀学」と決まる。専門家向けを1月に出版予定。普及版は今後検討する。著作権問題については、著者から著作権を委譲してもらおう(書類提出)ことおよび他の文献の引用許可は著者自身が取るという方針が示されている。

6. その他：特集号編集に関してメーリングリストをつくり編集委員に配る。

7. 次回委員会：2006年10月7日(土)14:30～早稲田大学教育学部で行う。

2006年度第2回日本第四紀学会50周年記念事業実行委員会 議事録

日時：2006年10月7日(土曜日) 14:30～18:00
会場：早稲田大学教育学部 16号館6階616会議室
出席者：熊井久雄(委員長)、町田 洋(会長)、斎藤文紀、久保純子、小野 昭、河村善也、松浦秀治、水野清秀、大場忠道、吾妻 崇、松島義章、山崎晴雄

議事

1. 募金事業報告：募金者に対して礼状とCDを発送した。8月の大会会場でCDを受け取った人と募金額が1口以下の人には礼状のみを発送した。春恒社にCD製作料と発送手数料及び郵送料を支払った。10月6日現在

募金者 244名 募金額 2,777,000円

支出 CD作成等 1,261,237円

振替手数料 20,970円

残金 1,494,793円

第四紀通信で更に募金広告を行う必要あり。募金振替用紙を追加印刷する。

第四紀研究のデジタル化は今後も続けていく。

2. 博物館連携：河村委員から兵庫と豊橋の展示について説明あり。水野委員から産総研の展示と講演について説明があり、作成したポスターとパンフレット(研究資料集として1万部作成)の紹介があった。

3. 国際シンポジウム：シンポジウム開催時期はAGU開催時期を考慮して2007年11月20-22日とする。会場は産総研共用講堂。

1stサーキュラーの作成：アナウンスメントの

募金のお願い

サーキュラーを早く出し、その後、登録用サーキュラーを出す。サーキュラーは斎藤委員が文案をまとめる。

組織委員会(事務局)の設立:産総研の佃氏に組織委員長就任を依頼する。産総研に問い合わせ用のメールアドレスを設け、それを1stサーキュラーに載せる。吾妻委員担当。

セッション内容について検討:セッションの統合を検討したが困難という結論。

各セッションの他に第四紀全般関連セッション(ポスターのみ)を作り、サーキュラーにはこのセッションについても募集(ポスター)を行う旨を記載する。

研究成果報告の科研費を申請する。また、各セッションは個別に科研費に応募し、その中に外国人招待費用の要求を盛り込む。

4. CD 出版物・その他記念出版関係の進捗報告:10月27日にCD編集委員会を行う。CDの販売価格は一般3000円、会員2000円の予定。研連シンポの出版物、動き出した。年度内に東大出版会から発行の予定。

5. その他:中国第四紀学会50周年記念会合 上海で行われるのでそこに斎藤委員が1stサーキュラーを持っていく。

次回日程:11月3日(金)日本大学文理学部で開催予定

日本第四紀学会50周年事業に関わる募金のお願い(再々掲)

2006年11月6日

日本第四紀学会会員各位

日本第四紀学会50周年事業に関わる募金のお願い

日本第四紀学会 会長 町田 洋
50周年記念事業実行委員会委員長 熊井 久雄

日本第四紀学会では2006年4月に創立50周年を迎え、50周年記念事業実行委員会を中心として、記念出版物の刊行、記念式典、記念シンポジウム、国際シンポジウム等の事業を計画・実施しています。

学会財政が非常に厳しい中で、諸行事はできるだけ簡素に、そして受益者負担の原則で実施する所存ですが、日本の第四紀学を世界へ展開させるために、そして、アジア地域の第四紀研究との連携をはかるため、2007年11月に21世紀にふさわしい国際シンポジウム「アジア・西太平洋の第四紀 - 環境変化と人類 - 」を開催の予定です。そしてこれにはアジア各国の研究者を招いて講演をお願いする計画を立てています。

このため国際シンポジウムを含めた50周年記念事業の実施に必要な資金を得るため、会員の皆様に下記の要領で募金お願いしていますが、現在までの募金額は目標の55%に留まっています。募金の趣旨と学会の厳しい財政状況をご拝察の上、第四紀学発展のために是非この募金活動にご協力賜りますようお願い申し上げます。

11月6日現在で募金者244名、総額2,777,000円のご寄付をいただいております。ご協力いただきました皆様には篤く御礼申し上げます。

記

募金目標は500万円です。1口5000円で募金口数に制限はありません。

2口(10,000円)以上募金していただいた会員には記念品(第四紀研究全巻を200dpiでPDF化したCD:非売品)を差し上げます。

募金は、郵便振替にて下記の口座にお振り込み下さいますようお願いいたします。

同封した募金専用の振り込み用紙をご利用いただくと送金料が無料になります。

(この用紙は募金以外には使用できません。)

口座記号番号 00120 - 3 - 614754

加入者名 日本第四紀学会50周年記念事業実行委員会

(問い合わせ先)

首都大学東京 都市環境学部 地理学教室 山崎晴雄 (50周年実行委 事務局長)

Tel: 0426-77-2592 Fax: 0426-77-2589

e-mail: yamazaki@comp.metro-u.ac.jp

50周年記念事業募金者名簿(募金到着順、敬称略、2006年11月6日現在)

下記の皆様から募金をいただきました。この場をお借りして篤く御礼申し上げます。

日本第四紀学会 50周年記念事業実行委員会

増田耕一、熊井久雄、杉山富雄、三川憲一、金子 稔、水野篤行、松井 健、垣見俊弘、亀井裕幸、竹中 純、田中治夫、平井幸弘、古川博恭、千田 昇、大澤 進、松葉千年、満岡孝、中島光世、今泉知也、青木賢人、三島弘幸、鹿島愛彦、桑島 達、鈴木 茂、野中俊夫、豊田和広、吉田 義、守田益宗、松橋義隆、木暮 翠、永井節雄、藤森孝俊、山崎晴雄、奥村晃史、菅 加世子、櫻尾重信、田辺 晋、勝田和利、東 将士、三田村宗樹、石井久夫、田口公則、久保純子、島口 天、井上公夫、辻誠一郎、古内栄一、吉川周作、小林武彦、山崎博史、沖津 進、杉村 新、長太伸章、佐藤裕司、荒井 格、植村善博、栗山知士、八千代エンジニアリング総業事業本部、半田久美子、黒田登美雄、兵頭政幸、能條 歩、田原敬治、小池一之、松浦秀治、北村晃寿、早田 勉、倉林三郎、伊藤ツヨシ、井上 弦、藤井昭二、松村 淳、和田温之、松島義章、楡井 尊、齊藤享治、西田和浩、飯島義雄、讃岐利夫、高田将志、長内優之、萩原法子、福岡孝昭、藤森雄一、町田 洋、水野秀明、上原克人、長友恒人、水野清秀、劔持輝久、池田 晋、山口啓子、浅川一郎、松井和夫、廣瀬玉紀、諏訪靖二、坂上寛一、片岡香子、小野弘道、渡邊眞紀子、野川 潔、杉山雄一、浅井朋代、松山澄久、上杉 陽、清水恵助、鈴木毅彦、石綿しげ子、原 芳生、奥野 充、小泉武栄、長橋良隆、小林忠夫、金沢直人、満岡 孝、陶野郁雄、楮原京子、檀原 徹、柏谷健二、真野勝友、星野フサ、会田信行、松下まり子、丹羽俊二、山縣耕太郎、遠藤邦彦、細矢卓志、河村善也、中村琢磨、岩田修二、矢島典夫、里口保文、中村俊夫、菊地隆男、神嶋利夫、五藤幸晴、幡谷竜太、鈴木郁夫、須藤忠恭、高遠 宏、大村明雄、清永丈太、近藤洋一、佐倉 朔、永塚鎮男、桑原拓一郎、佐々木俊法、野村 哲、田中正央、羽鳥謙三、大城逸朗、渡辺秀男、堀口萬吉、本郷美佐緒、白井太郎、磯 望、木谷幹一、小元久仁夫、犬塚則久、熊木洋太、古谷栄次郎、藤原 治、山田 哲、叶内敦子、神谷千穂、黒川勝己、門村 浩、小林 巖、宮脇明子、高野武男、内山美恵子・高、赤羽貞幸、笹川一郎、中里裕臣、鈴木正章、小橋拓司、春恒社・中山五男、小野 昭、萩谷千明、森江孝志、近藤洋一、西山賢一、山本裕之、池原 研、中川久夫、中川 猛、吉山 昭、山本 博、斎藤文紀、鎮西清高、成瀬 洋、池田重人、加藤芳朗、太田陽子、紀藤典夫、堀 和明、白石建雄、花岡正光、長岡信治、田中義文、及川輝樹、渡邊眞紀子、公文富士夫、北爪智浩、岡本 透、伊藤晶文、貞方 昇、前田保夫、平杜定夫、大場忠道、伊東徳治、苅谷愛彦、東郷正美、藤井理恵、菊地隆男、渡辺栄次、野口 淳、佐々木圭一、酒井治孝、豊蔵 勇、市川八州夫、百原 新、吉田明弘、渡辺哲也、岡崎浩子、坂本順哉、馬場勝良、後藤秀昭、宇津川 徹、杉山真二、渡邊正巳、鈴木隆介、瀬川秀良、植木岳雪、小泉明裕、金 幸隆、創文印刷工業(株)、三好教夫、田村糸子、吉永秀一郎、林 和広、吉田邦夫、杉田律子、石橋克彦

(お名前が重複している場合がありますが間違いではありません)

以上、244名

2006年度第2回幹事会議事録

日 時：2006年10月7日(土) 10:00～13:30

会 場：早稲田大学教育学部社会科資料室

出席者：町田 洋(会長)、斎藤文紀、岡崎浩子、兵頭政幸、遠藤邦彦、奥村晃史、水野清秀、中川庸幸、久保純子(記録)

報告・審議事項

1. 庶務

- ・会員消息(8月、9月分、学生会員の更新の報告)
- ・掲載許可

日本ペドロロジー学会『日本の土壌』へ、貝塚爽平(1963)第四紀研究3巻1・2号の図の掲載を許可した。

大阪府文化財センター図録へ2003年普及講演会資料集の図(河内平野の古地理図)掲載に関しては、

原典を示していただく。

・北海道開拓記念館特別展「北の縄文 - 美の世界」の後援を承認した。

・「道立博物館施設への指定管理者制度導入に関する要望書」提出に協力することとした。

2. 会計

大会実行委員会より2006年大会の会計残金が第四紀学会に振り込まれた。

3. 編集

・第四紀研究編集状況報告

・電子ジャーナル(J-STAGE)の利用申請を行うが、詳細は編集委員会で議論し、幹事会へ提出する。

4. 行事

・50周年大会(首都大)報告

・2007年大会(神戸大)の予定(実行委員会体制、

日程、会場、シンポジウム、巡検等)

5. 広報

- ・「第四紀通信」の件
- ・ホームページ更新の件

6. 渉外

- ・日本地球惑星科学連合:「第四紀」、「活断層・古地震」セッションを設ける。
- ・自然史学会連合講演会(11月12日)学会ポスター展示の件

7. 企画

- ・本年1月のシンポジウム「大都市圏の地盤 - 私たちの生活とのかかわり - 」を特集として「第四紀研究」に投稿する。
- ・2007年1月シンポジウムの内容(日程,会場,テーマ,発表者)

テーマの候補:「第四紀野外研究の啓蒙とサイト保存」

- ・講習会の予定

1)火山灰層の研究・分析法(滋賀、1月下旬または2月上旬、2日間)

2)貝化石(または動物化石)群集を用いた古環境の復元法(神奈川、3月または4月はじめ)

8. その他

- ・50周年記念国際シンポジウムの日程(2007年11月20-22日)オーガナイザーの件
- ・知的財産権等に関する検討委員会委員候補者の選定
- ・学会賞選考委員委嘱の件
- ・INQUA分科会に関する件

次回幹事会は11月18日頃の予定。

第四紀通信に情報をお寄せ下さい

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。広報幹事:兵頭政幸(mhyodo@kobe-u.ac.jp)宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月上旬原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が出来た段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月15日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会
神戸大学内海域環境教育研究センター 兵頭政幸
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
電話 078-803-5734 Fax 078-803-5757
広報委員:松下まり子・後藤秀昭
編集書記:岩本容子

第四紀学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr> から第四紀通信バックナンバーのPDFファイルを閲覧できます。